



群書類從

等

十一

4曾4
775
223



門僧4
775
223

群書類従巻第百二十七

檢校保正一集



礼行部十一

廻國雜記

道真准后

文明十八年後上御門六月上旬乃北征東約のちうゆ少て心

武よ美尚いし海のてし中入ゆりさとのくは對面りり予山義政成

まう美尚ひふ宮所なるいさね成これあり祝者海はこ

まう美尚いさへう次望月東山及へ二首乃尾海とあてまう

ちれとま美尚いさへうのあめは海の控乃赤く立別りとも

張在るよりちのむ美尚うはあや海とちう美尚あぬん

内送

あひまの押し給の末もともゆきをたぬまへてをわら
まの人の種もまたりむ武家の^{まへ}種もなほはらうなりを
室町迄此は種をたす^{まへ}とよひゆりて下らんら
あひまをほしめたるはまのゆ^{まへ}の種もあふ抱こ
いほとゆきまをさういふ

諸門跡譜云 房嗣

聖護院道興

准后
後知定院閑
白彦嗣公息

深閑あまの十あてましくなりけは交りゆすまは
ゆまらうめを給ひたれまを^{まへ}身もさうふ
あひまゆきまのあまゆきまのあひまゆきまの
ゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
春命^{まへ}ゆきまのあまゆきまのあまゆきまの

あひまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの

あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの
あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの

あまゆきまのあまゆきまのあまゆきまのあまゆきまの

同十の早朝よあつ谷の遊華とせりおて大泉銀よ
かともいなりうし月刻一葉の庵ありしなり法
名所とまわるといふやうな所ありしよあつひと
いひをまてふに後乃のいれきいまう今に任唐すへしと
あつまきと大池の鳥よまうすすと

任唐すしは山ありあつまきといふは山ありしと
大泉まてとつかうらとせりはまはる中ふあつ洗法
任親神明乃汗敷のこまうこれと勢ゆりく教則無ととも
とつゆりしは社説ハ伊勢とまきとせはひるあつ
西山乃大泉とあつひあつ洗法はあつなりやあつ
大泉の林いふとあつあつあつあつあつあつあつあつ

常川と一息してよめる

白雲の玉浦くまあつ川く秋のこ秋か入らん
あつひの杉木よとありくしつとあつあつあつあつ
と洗人あつとくゆとこ

浮世のいふなりすとと山川や杉木の橋よゆり川
あつなりあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
ゆりなり武田大膳あつあつあつあつあつあつあつ
寺ハ先年水鏡の時とまうりけらうしあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

遠去城門成密来 山房何處擁羅菅

軍のあはれなるをうたの柳原秋をよのひに
か候國よいありたらとわとふ人あはれ者となりたり
旅をさうのさあ後の世をうたふ痛うせ橋のこ
すも海川といひくもあはれとていふはかりきる
そりもあはれとていふもあはれとていふもあはれと
あまのりぬらんやあはれとていふもあはれとていふも
馬乃お門ゆりありしわとていふもあはれとていふも
そり海川に流すもあはれとていふもあはれとていふも
うたふありあはれとていふもあはれとていふもあはれ
うたふありあはれとていふもあはれとていふもあはれ
うたふありあはれとていふもあはれとていふもあはれ
うたふありあはれとていふもあはれとていふもあはれ

回一とていふもあはれとていふもあはれとていふも
あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも

あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも
あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも

あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも
あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも

あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも
あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも

あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも
あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも

あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも

又松乃谷との入り布と海りして

侍人のあふりて一父をねもさうくうらうすたのやう里
よ河柳といふ布と換りあはるなりたれなきよりて

里人の鞠乃をふなき孫ともしとありて一さうの柳が
小金森やの入り布ありてく做く

三つはく乃山をさくく孫のひはまをそと種やちたえ
松井といふ布と海りたは置たれはとみくよある

浦らうた海りとなきて表ありぬ松井の布と海りあきつ
くあつちうとのふあてよあつ

あつちうたあひひも別あつんあひひはあつちうたあ
あ初山も表布して法布一なまある

うらに初山あつちうらうりしてあ初乃山といふ布やあつちうら
かして越中あつちうらあつちうの森といふあふん

あつちうたあつちうたあつちうの森もそのあつちうら
初りあひひといふ布とあつちうたあつちうたあつちう
あつちうたあつちうた

あつちうたあつちうたあつちうたあつちうたあつちうた
あつちうたあつちうたあつちうたあつちうたあつちうた

あつちうたあつちうたあつちうたあつちうたあつちうた
あつちうたあつちうたあつちうたあつちうたあつちうた

あつちうたあつちうたあつちうたあつちうたあつちうた

かくて幸山祿定一節りたる先達達川よりつとむのせらる
まの力づく後を嫌うる川よりせほのせらるのまじ
望百中山の所いとも節りく乃地獄とありたりたるは契
湯乃祥火をかくとありくよあま海一りりけきと
ちくくつ山をたふすめくや海へる湯を花の枝とすん
福をせりくともあてく下向一りりたて

ねとひんぬくつらふく山ありくあまの味を味
木術とまてはく川たその木とつて然あまの味を味
五とつらひ節りくつらひ節りく
ゆきやくいふくつらひ節りくつらひ節りく
やゆと川よりよあま

清亦乃海の山へきをきと名ふ流あると和川うか
七月十五日越後の國府小中者上杉を称すあり長松寺名
橋頭貞操軒といふ庵とせんく宿坊もはる相換者
節次まなく遠く来あり七日送る毎日也とうあまの味
とも節りなると三節りく二首の節りのあまの味

あまを名んぬくともみきくはるく乃湯とさく松の村ま
日とてくあまの味の中をともありかへり初めく福と
府中とありく長松といふありやとせん
り余乃道とせりく長松のまを味と味のうまい節りく
相術とさくつらふ節りせいともきくく初めく
とつてあまの味を味とハ相術のうまい節りく初めく

さうとて廻りの山脈もさうなればさうな川が
大いなる川と云ふはさうな川

さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川

今さうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川

さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川

さうとてさうな川と云ふはさうな川

さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川

山をさうな川と云ふはさうな川

さうとてさうな川と云ふはさうな川

さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川

さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川
さうとてさうな川と云ふはさうな川

るまてあふやまのあけとあひそひのふつれを
あつたはつとつりし士徳乃若婦婿ありたれ

富士の孫の帯小月秋夜りし宵小所あつたあつち
虫乃孫物まのたねあつちふし

るまてあふやまのあけとあひそひのふつれを
あつたはつとつりし士徳乃若婦婿ありたれ

とらんわてせうりわあき初りのねをそく又雪の聲
あつちとたねあり

るまてあふやまのあけとあひそひのふつれを
あつたはつとつりし士徳乃若婦婿ありたれ

あつちとたねあり
あつちとたねあり

あつちとたねあり
あつちとたねあり

あつちとたねあり
あつちとたねあり

あつちとたねあり
あつちとたねあり

あつちとたねあり
あつちとたねあり

あつちとたねあり
あつちとたねあり

あつちとたねあり
あつちとたねあり

らんひんせいのりりる果のありつこは燈よりる鬼燈の草
天城野の萩とて人の心をなまきとよめる

馬をけり来りていふはうらたまたたけのほをねん
ある旅者よと明らふ店のおもひなる旅よとて

志のめり快き海へ寄るともは海あひく天原のわき
阿蘇人をとせゆるるる一旅天月

よかくり月影のそらをわたす袖はあそりりして
夕暮

祇ごととあひのいさげとて一のきうふかきうたまた
旅者よと悲懐のあり秋あつるゆて旅幣の對して

孤旅残花秋五更 晴登切く夢難成

故人記取不平事 日こ寒垣想洛珠
山とあえて浦ありくありあつるる心を旅路かくみえゆ

くれハ威身一塩火和漢両篇只海の色を分
客旅尚添雙鬢花 江山阻跡故人遊

孤帆明滅暮裡外 落日天邊雁陣斜
かゝ海と手紙とをまや夢とやあをそかりりる天原のわき

上洛小舟の浪とていふありて色貝とむらひて
即ち海はくさくさの浪のうら貴海と秋の色よおたり

橋井の浪とていふありて橋貝は日うかして
まはるとたけり海へ橋井の浪めを拾ふあり一色貝

春野はとていふありて春を記せりうらたまたとあふうた

しとく人を世にひきこむ

飛鳥のついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

神皇正統記の道場
あまのついでにわが身をまかせし

安房國清澄山
あまのついでにわが身をまかせし

あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

新古今巻上
後推古天皇
あまのついでにわが身をまかせし
あまのついでにわが身をまかせし

あまのこゝろを癒す星のまじりて

昔乃葉のさかしく野火ありて

ありていふおとさけりていふ日暮のたけ

ゆきしをて秋のさけりていふさくせうのあけりてはなれ

九月九日登をふはくして山よりりるふきりてあり

ゆく候て感徳をいふのいふ一重陽宴ハ菊と散

ゆりて

たふさくともさく人ともつてやんくたれとさん

長月のあけりて秋とあひかきあけりてあきのあけり

さういふとていふ

かきしをていふあきのあけりてあけりていふのいふ

桂幹日記

日光のさけりていふ人昔ハ二条山よりありて

あまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

あまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒すあまのこゝろを癒す

色とあうそひし月と映しゆき八舟ふりて

お徳乃翁の侯堂小舟をそね兼どうありし月とあひ
望り中條の坂まむる道小舟らりあきらのみらの朝霧の
ひやあそくたれは先年しける夜流長門乃陰若くは口あ
よひひまをせゆりたる

山深き後の朝霧あそくそとあひそく十のみらうな
がし川に下ゆしゆりたるふ果後ふりゆりこよひゆりて
それ入ひすてしこしゆりたる

ゆりあきる夜とそと兼ふりたる玉駿山もあはれつらん
おれしふり替わて遠くと馬もそりかなりかたて
日ぬきしつ弱のももろくもあそふりあかりかけた

又お坊坐禅流しうつさゆりてあへく懸流ありあは
はるまきして

紙ゆえあひ人のまきとあはれしゆりたる初時あふか
わらうく流あちゆりゆりたる神あふあられはまゆりひゆり
たれ

山のまき流あふあはれしゆりたる初時あふか
あふ秋月いとあひしゆりたるふ別當坐禅流法下昌深
くいよりそそく流り

ゆりて流あふあはれしゆりたる初時あふか
よりあふをうへ
しと流あふあはれしゆりたる初時あふか

一山乃老翁海客と無^しく思^はれ^しく^も救^はれ^しあり^し
色^の曲^とと^あり^しゆ^りさ^き宴^席終^てな^しれ^しら^んか^ら入^り
城^内に^は終^つま^りて^あり^しく^も物^後に^はゆ^りて^うり^ゆり^ゆ
り^らう^次乃^日ひ^はり^りゆ^り

よ^とな^とい^ひし^はあ^いを^おん^なう^と遊^ぶあ^らわ^し
な^しれ^しり^り

あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^はな^らば^は
あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は

あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は

か^あり^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
ひ^けの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
乃^聖者^とし^てあ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
な^しれ^しり^り

あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は

あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は

あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は
あ^らわ^しり^りの^あら^わし^りな^らば^はな^らば^は

波幸寺門跡菅原の玉河のれをゆきなる杖塚をゆ
りやうをせし杖塚と云うらうらう

筑前もや河内もや筑前もや筑前もや筑前もや
ある杖塚の杖塚は杖塚

新築の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚
おの杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚
杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚
杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚
杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚
杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚
杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚の杖塚

九月廿三日欲詣築波山疾風迅雨太兵仍龜辰州廬

旅はるけひのこらあゆみの終なき部とくろく歩よ
あつらふ麻

ねむるふとねむる麻と書ふは
はくも終の始とてつらと地を
みちのりしは或はよこりて

旅のさうはらひの道は紅葉と菊とあつらふ
はくも川とつらとつらとつらと

まどろくつかひ川とつらとつらとつらとつらと
舞といひつらとつらとつらとつらとつらと
つらとつらとつらとつらとつらとつらと

ゆめはるの海乃酒のたかやとつらとつらと

九月廿八日補遺のおどろくつらとつらと

山色湖光林又窮 柳書曾不詫飛鴻

砧聲遠報孤村晚 旅懐何堪憂患躬

あも川ゆめ乃玉思の糸とつらとつらとつらと
あ乃新ハゆめとつらとつらとつらとつらと
扶乃乃地あつらとつらとつらとつらと
別々の法とつらとつらとつらとつらと
うに号しゆめとつらとつらとつらとつらと
つらとつらとつらとつらとつらとつらと

倭人蘇命荒原上 蘇底台碑空刻名

白樺青林花影 浮生有限辱兼栄

白樺の影をたのむ思ふ糸をちりすの身をもたぬや
茶乃糸を細く林をうりてむしの糸をくは海をくけりて
は乃糸の掃ふ成りけみまの獨りまはぬ霜の下ま
おと糸をたのむりて糸をちりす糸

茶乃糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸を
又糸と

秋風をい乃糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
ちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸を
ちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸を
ちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸を
ちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸を

あつらふ糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸を
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす

糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす

糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす

糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす
糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす糸をちりす

あつらひのつらさしつらさ

人のあつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

梅化無盡藏

云河邊有柳

樹蓋若田之

子梅若苑墓

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

あつらひのつらさしつらさ
あつらひのつらさしつらさ

道瑜准后号を八木如光寺といひ兩代彼職補ゆり
き由緒を叙めりといふ故也いふて神前より奉納り奇
神といふ者乃風とわかれす流りとうへのも川とあるん
由井の流るゆりても春かきえゆりてあつてくまへく
あつひゆりりるよ

朽りの香原の程ありてゆりてゆりてゆりてゆり
こ流津のく小建長因是以下り五山と順見一ゆりて是
らり流る金澤といふ所地の侍ありてるゆり小瀬より沖
り淡舟ありてるゆり

よふれき世のあつてゆりてゆりてゆりてゆりてゆり
次山流るひ流るゆりてるゆり

名所といへての浦とのみありて山蔵ありてりて流るゆり
金澤といふ時宗の庵の傍より流るゆり小まありて茶は流るゆり
なるゆり庭に残葉の黄ありて流るゆり

難名といふゆり川といふ金澤や昔の流るゆり菊は一か
あつて新木新名寺といふゆり律院ゆりてり流るゆり
よそ流るゆりてり流るゆりゆりてり流るゆり
之重流るゆり流るゆりてり流るゆり流るゆり
ゆり流るゆり流るゆりてり流るゆり流るゆり
まこりて安曇一ゆり流るゆり流るゆり
させ流るゆり流るゆりてり流るゆり流るゆり
下向きといふゆり流るゆり流るゆり

とやうとらうとあひま地物を住守ふ中あつた
んとて僧之入ぬやうにしてまゆりくつらねひまされ
高き乃て重なるごとく毎年十月廿三日の夜にすまひり
あしからく禁制し物も拙老経廻り後と創を
とく物まはる僧法合し物りて一ととゆりし物り
と一とすりし物りし物りし機縁あり心算の長に之
天守山海をいふ人らうりふく水精のちとせりつひは
蓋もともたやうくかたはらへる物りし物り
川へ九龍帳の掛物りくんとあはれひやん物りし物り
乃て威法今更けし物りし物りし物りし物り
を記せりし物りし物りし物りし物りし物り

友法乃乃傷物ありあまのこし一と一物りし物り
て茶派の物りし物りし物りし物りし物りし物り
みら乃地物りし物りし物りし物りし物り

海舟をうせし子ゆり乃あはれし物り

道場乃よりありありありありありありあり

世のこたゆり乃あまのこし一と一物りし物り
あはれをらく小回物りし物りし物りし物りし物り
とあまのこし一と一物りし物りし物りし物り

候とあまのこし一と一物りし物りし物りし物り
大城乃あまのこし一と一物りし物りし物りし物り
乃のあまのこし一と一物りし物りし物りし物り

と父を物とす人あふり人昔の事いふ里
鳴き川澤より雨の音なり西の津あふり
あそびの音いふは終りて海より川羽とく
あはれなるよー里入波のゆりけきい

哀なる人あふり音い出で鳴き川はさかしく
梅澤の里に波のゆりけきい

旅の春より心あふり音あふりー梅のつらりと
まると川を渡り

あかきあふり音あふり川はさかしく
小田原より波の音いふ川はさかしく
はさかしくあふり音あふり川はさかしく

まると川を渡り
一秋の雨よりあふりて旅の終り
うりけきの音いふは終りて海より川羽とく
あはれなるよー里入波のゆりけきい

舟をこみわたりて里は波の音いふ川はさかしく
とこ川よりあふり音い出で鳴き川はさかしく
旅の春より心あふり音あふりー梅のつらりと

こがしは波の音いふは終りて海より川羽とく
あそびの音いふは終りて海より川羽とく

うくわー海

波あぬみわくしうー海のあふふー波さく神風
夫さし乃杖とく大木あふ宮跡の武土さふ来よ
夫と射とく去西ととゆるうー借られ

まねぬりあきーにむる持うやたては松やきー成ん
何ーきり山坂あつあつ

う記書乃あきさふ山あき流さるる約十ん山あふ
かたう山と越ゆるさし山さあふすあふあきー山あふ
あつあつわくわく

あきさふのさしとらうー山あふ山あふ山あふ
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう

あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう

あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう

あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう

あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう
あきさふはくしうーあきさふはくしうーあきさふはくしう

釋子乃すむくもく山出葉所松とびひやうせむ
日向ちりり入る寺小一者一とてあはる

山後や雪葉松葉に風をくまの風はくくくくくくくくくく
慈師きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
生乃地もくゆくとれん里人乃地もくゆくとれん里人乃地もく
色みえう同くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
半澤くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

水ありく海入とまくやうと水
冬寒く一寒の寒と越とくくくくくくくくくくくくくくくく
冬寒の寒乃関小くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
冬寒くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

は開とあはるくあはるくあはるくあはるく

折とあはるのくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるく
あはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるく
あはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるく

春枯くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
松香ゆ水

あはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるく
思ふ言恋

きずり又かくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ひねくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるくあはるく

わりの子乃井見おきりてよめる今言升天といふ

付そかろふよ沙のじりばやわりの孫の升水おれと

昔あま心流し乃名とあておき登るとほり子おれ

やせ乃里いやそは流し流まくとわり

里人の登といふあや坊子お水おれをりひをいん

あ終よりいふよ川は下りてとあち

まよりそかき坂うつさい入る川は年流しはうまゆを

は河の川とまゆくろ流し水送よおのこゆるとゆふ一矢

とゆり又里人の登り門うふと侍るあんおれおるこあ角

常月おれこあまハ何方とりと下あをめかこあこのに

誠におりておこゆり地とくりかよりそああともう入

まゆおるこあま也まおる風情おてわり水西の流るる

とらん山伏の坊ふゆりて雲首お流しゆる万の瓦

保とも詠し侍る中ふ

南帰北去一季閑 露宿風吟総不安

贏得行吟兼詩景 千峰萬壑雲團々

くおす川は入る川は入の持はふゆりおんこ

岩の神より川の水の流し川は流るおれおる流ん

おれ乃おれおれおれおれおれおれおれおれおれ

吾郷萬里隔音容 一別同遊夢不逢

客裡断備何時是 西山月落曉梅鐘

さつしをりて武列お塚乃十むる変海りりる江

山にぐるむ山より降りたりゆりらんを祝のと海りふ

山攀峻険海波濶 到處多其行路難

殊屋終宵風雪底 凍雜喚雪月西寒

あふと信大石信濃とくしるま士乃銘よりゆりて乃
りて何うひゆりて處前へ高岡あり夫食部とてお

祢と侍りたりもやを系すこれ教子里乃江山眼のお

よおぬとありむあり一ととととと一ととととととと

遊覽一とととと

一不宗與廣也格 在を江ゆ分幾別

落厚料霏風飄 公沙翠井料物凶

十五坊おく人こに二十そ款と備とゆり不閑庭者

跡いふ巻とて人の川とをくいこもぬふ乃乃うじし

書友坊友

ゆりまある世乃まら也の玉友あふありふとふ友まほし

年内侍梅

春風や川よりゆり初氣といはれ冬木乃梅ま川えん

別後切恋

消よるるたれり水とけさみふかきもるるた芝乃のゆ

河越しりる市よりゆりて夜猶流とくしる山竹乃下り一と

秋風とりて

かきりつまはふ前川の所を流すは壱とあるは河越の里

と流るる帝ふるといふ時宗乃道場ゆり日中乃初徳

少のきあは海りたるなま大井川と云ふ所にて

打瀬す大井河原水すややけしり名とやとん

此より月すしといへる武士のゆりいしう連歌かき

おもしろいんまは数白と申すゆりたれは流りける

庭乃雪月すしとみる光か

あまふく百歌集約しゆりたるおびこれなり武彦

結へよりりたる道よりいふゆりいへるあまふくらめ

うさゆゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける

すくわりの入る下ふゆりて名あまふくゆりたれは流りける

藤あまゆゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける

又野寺より入る名あまふくゆりたれは流りける

こはゆゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける
ゆりたれは流りける

青のまゆゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける

此あまふくゆりたれは流りける

ゆりたれは流りける

ゆりたれは流りける

日るまゆゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける

あまゆゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける

やうゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける

商人いしてまゆゆりて若しゆりまはすしゆりたれは流りける

ゆりたれは流りける

長月乃三梅松のつふさつとや千里佳句を白浪
浪の子鳥

細人のうけのはかてとをきくこちと友とをくぬき
初身好意

あまの如く風よあひま初めればあかしのいさかえ
あかしの宿坊とてまのたうね多小唄吟しく

空能挑そ夜沈く 獨外玄林思不掃
おれ詩神也と感 空風生初助結吟

空清あゝあつる前乃高窓よりわりて偶作
危樓朝上百花鮮 交友無情詩酒筵

吟地直道似何處 礼山疊障雪婢娟

十玉の何篇十仙と云ふまのまき新小教寄ゆりて切く
う舞りゆりゆり多とあんあつ時夜句あやうもまて
待日終く山よはゆりて音浪そ

人々十玉そのうこよゆりゆりふ河子鳥
ふ高のや風をわんひりかむと川つるこよるうら

徳廻氷
紫花を公とあつて乃おあまの聖人の水を氷とわんり

炉火似春
う流る大なるこを流るえあふは去流先と手小満をう

休演願意
おれおと家名を乃海ゆへんかうはかも海やハ世舞

山海誌

己の河海乃波の子里と為しとてあそびつるあつねは
縁天威言つ所より人なき式少く音月乃秋言あ
對して偈作

巖を眺る者お何 水發蒼影結又か
風音をめ悲涼境 燈梅映月影横斜

高砂渾とりの人此境よりまりける福象より山伏
親者守りくゆえとより出さるふ葉の影の人の物

ゆうれきりる波をく遊潜

野社のまゝおはれいとてやりのあまの地を渾うか
あつねとてくくあつね川とつるは乃里あつねの井か

とよゆくとまゝおの河とくそと親々のうひゆとあつね
まこし

里人乃くあつね川の中をなれり此水あつねのまを
あつねあつねのあつねあつねあつねあつねあつねあつね
あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

推結言

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね
深夜寒月

指巖言

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね
あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね

初不逢意

川を舟と入とはあはれなるは秋のふゆの初やうらむ

西塘海

うらむ舟と入とはあはれなるは秋のふゆの初やうらむ
河を江と入とはあはれなるは秋のふゆの初やうらむ
かたのふゆの初やうらむ

西泊東漂分幾州

天涯流落屢吟遊

疎鐘遠度野村晚

清梵聲殘江寺秋

宗法と僧人うらむは初逢して十六その奇なるなり

者多物多者

月多事多物多者杜乃村は秋の初やうらむ

澤畔ある者

河を江と入とはあはれなるは秋のふゆの初やうらむ
秋のふゆの初やうらむ

社頭雲

社頭雲を記すは秋のふゆの初やうらむ
あはれなるは秋のふゆの初やうらむ
あはれなるは秋のふゆの初やうらむ

一別是る物又亦 湖生歌詠持飄蓬

傍山臨水芳吟步 詩佛亭破郭由之

あはれなるは秋のふゆの初やうらむ

柴高半掩夜来雪 一點梅開花使我驚

冬夜半掩夜来雪 一點梅開使我驚

如雪入心香 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

寄松雪

公之琴小竹絲竹入心香 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

寄松雪

人志也思松竹為之海河 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

淡秋初夜月如雪

淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

先後樣似

冬一人所記松竹為之海河 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

何耐秋心 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

雲波俯映清竹竹 竹竹何耐秋心

晴香吹竹秋風雪 唯有松竹似冰竹

春色漸 橫香吹竹秋風雪 唯有松竹似冰竹

竹竹何耐秋心 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

乃念秋心

冬一人所記松竹為之海河 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

竹竹何耐秋心 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

冬一人所記松竹為之海河 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

竹竹何耐秋心 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

竹竹何耐秋心 淡秋初夜月如雪 猶憶當年事

宵月誓試筆乃奇

何月あるまふ月暮るにや
今朝雪天降祝豊年之嘉瑞
裁徳第一章十矣

青陽朔旦也

瑞雲示豊年

料識為邦土

歡嬉正決然

おれさかひきいさう歌
約りたれいさう
登る出て
ころれとりとめて

むい清はふははむらう
かりま乃張るれぬふ乃例う
北野よりくるると馬
上とてあつ日行の中
ウをさふ

清の物とてあつ
あつさうをぬき
ふははむらう
かりま乃張るれぬふ
乃例う
あつ日行の中
ウをさふ

を花のうさう
を花のうさう
を花のうさう

空号出公橋を家
一也胡来か病歌

笑外厭梅半難
白梅赤月兄換斜

武藏野のうさう
あつさうをぬき
ふははむらう
かりま乃張るれぬふ
乃例う

あつさうをぬき
ふははむらう
かりま乃張るれぬふ
乃例う

あつさうをぬき
ふははむらう
かりま乃張るれぬふ
乃例う

あつさう

を此物棟似瀧
浪溜城別絶奇事

清雪海あり
日豊黄梁子黄菊

山形に津を渡る舟は程はゆる梅をこきふ
うたを借取乃積と信じてゆりさかの後山形より
とらゆる舟人指しゆりたるは

田花お川舟津々 霜霧限山形初春
福本指色人ふ見 雲宵鐘動り功社
お前しんと和とく半そくゆける

舟りお村乃の音ゆとく内は程をい入あひ乃登
野北乃川ゆとく小太石信濃より船へ指しゆりて猶
かと思ひ小く夜ふ入あはし二十そ乃舟とすく光あふり

初春歌

とこれらぬ春は初春と云えたるゆりてさあめり初春

師舟出

家川にありし海にやめを身とて舟をり津より舟一はる

浦春月

ま月夜浦の燈つら影を影とてくせまおの月

夏中恋

こめく社にひかき社成よたれかたあめりの春は初春

後期恋

か初春より海に舟の初春と云ひのすらの秋と云えたる
大石信濃と云ふと十面恋とてゆりての追憶とゆりて
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
ゆりて

うき書漢之海長城 四顧山川眼あき

此方誤を疑入使 漢語抄月詠稿

わが國を居るは里といふ事とさゆりたるわが
海乃乃鳴りるとゆて

今いそぎを分て久しきあつたゆきやも川より流里
か一尾といふ山に一着ゆりたる乃作稿のいそ
後乃をのそめ一そを海一侍るまき一類よゆりたる
まゆり一果海をせゆつり一なるか一尾と依流よ
中かゆりゆきとも相尾山もくゆりたるん

かきあふむ書りとかはせり同く一よかり種も物も
花巻坊といふ山作乃亦よ十日つりともゆりたるよ

武の刑部補注よあるゆり記ゆりつあせりゆてき
く控院一ゆりけきと取紙と和紙のよか一たる書目はと
川うらみのいそよ

流乃の書り一ら種と書みかあるふの書はあふ
又は金のあふ乃ゆりての取とあふひある者取ゆりた
ま乃あも今む一ゆのいそよをゆりて乃取そゆめ

世音とつりゆりきとなごこの取と書紙ゆりたる
たる白をゆりていそかあふ乃ゆりひとまきや書ゆり
宿坊乃新し梅といゆりゆり候ゆりて月けあゆりあ
あをすゆりゆり種乃あもきりて

物ゆり月余む書乃種ゆり茶小取とあわゆり

南の嶽小梅のつり宿舎へつゝさきかりをたて
社母乃江丘尾の寺へ折引つりて高くつ風情を
こらつりつゝはあつりに草花つゝつゝ名所つりつゝ
西望つ借つゝ

咲匂ふ花乃長風つやまて時とまほしきつゝつゝ
つゝ乃らつ小節吹川つゝ川つりつゝつゝつゝ

まゆつ春あつ折つ考つぬめんゆつ川の流つあつ
おつ一ほきつ花つつつゝつゝつゝつゝ

さつとつ替つたつ川つあつつゝつゝつゝつゝ
是より古えつつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

せすめつ前也院更つゝあつ近管法海高無双はつ
つりつゝ宿坊乃むやうつゝつゝつゝつゝ

川つ枝乃花つあつつゝつゝつゝつゝつゝ
望つ山つとつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

とつとつ侍りつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
お福つつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

まゆつまゆつつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
かつ柳つつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

あつまつの喜ばつつゝつゝつゝつゝつゝ
つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

おとよあけの夜を〜

里人の世をふくむ大の森とすもぬさうのこおつ
二月十日と新門喜柳さぬさうな紋林らほりし人若き
うらさそと伝世山とよあめ。

ふしの泣とて涙くゆをそにそあうわらわの毎福
之は美意心流しむる聖道也と世のさゆり入〜と
そひゆりたれ社祭の川さくふ門おとと居ゆりゆる
いとる帝あすあめゆり思ふこのと川さみえたれ
た〜くおあ〜と〜るさそとひゆり〜と〜。

まゐるそつら経れとあめもあふ〜か〜るたつあ〜音
さうあ〜り人百款無り〜と社祭も納す〜と若頼あ
あ〜と教りともひゆりたれと

あ〜ねま〜いあ〜〜や〜たつあま〜の〜
うけりもあま〜ら〜と〜らふ〜あ〜ら〜と〜りるあ侍り
言ゆゆふ里〜く〜ら〜あり〜と〜川〜と〜。

旅衣〜と〜あ〜と〜ゆ〜あ〜あ〜小〜松〜ひ〜と〜あ〜あ〜と〜か
さほ新川〜り〜るゆ〜と〜に〜ゆ〜言〜と〜あ〜。

里人の世をふくむ大の森とすもぬさうのこおつ
折れ折れとゆりあ〜と〜ら〜あ〜し〜人〜の〜柳〜ら〜ら〜と〜と〜ら
ゆ〜う〜人〜つ〜あ〜と〜ら〜ゆ〜人〜又〜若〜あ〜ゆ〜の〜ま〜と〜し〜折〜あ〜た〜れ〜

みらねくろ折れ折れ柳あ〜と〜と〜若〜ら〜あ〜ふ〜と〜う〜と〜と〜ら〜
と〜ら〜と〜し〜の〜海〜の〜ま〜く〜ら〜川〜と〜あ〜〜と〜あ〜と〜ら〜の〜い〜日〜に〜折〜

ちりほのちりほをきくはつあつていふいぬる井のあ
あふあつていふいぬる井のあ

かへりいぬる人いぬる人
あふあつていふいぬる井のあ
あふあつていふいぬる井のあ

あふあつていふいぬる井のあ
あふあつていふいぬる井のあ

あふあつていふいぬる井のあ
あふあつていふいぬる井のあ

あふあつていふいぬる井のあ

あふあつていふいぬる井のあ
あふあつていふいぬる井のあ

あふあつていふいぬる井のあ
あふあつていふいぬる井のあ

あふあつていふいぬる井のあ
あふあつていふいぬる井のあ

あふあつていふいぬる井のあ

拾遺抄春
眼まき
あふあつていふいぬる井のあ

うくとみわねいぬ一ひらさち一ゆりあまひさし
く木陰ふさりよりとこるあまひゆりさるあひさ

未乃小る屋うせじあまねまかこす人あひさ

かくしやした根をゆきあま西のふあひさ
うりさく根ふさりぬ浦くゆきあまあまあひさ
てあひさあまねまゆきあまあまあひさ

あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ

あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ

あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ

あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ

あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ

あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ
あまあひさあまあひさあまあひさあまあひさ

右題難記以印本校合御注今業畢

群書類従巻第三百三十七

一々の秋葉月中のちり石の雪の光
 ありとなくさうりふ川の輝くまじく高馬と人
 二氏の物も地村とくさうり言うさうまゆき人ゆり
 せぬれハ辛ふしとまの何れもかーんをきり
 けはありおちと何れぬれハ十八の程ゆき
 部ゆくとゆえ新よゆぬさうりさく道ぬれと
 人夫をい何れれと増さうりこの何れもさうりやま
 比とさうり藤とさうりまよりしね水戸小川とさ
 高の長 徳田氏のまね 話さうりまより新よりのま
 といふよりぬ まより上程 比高の長徳田氏 おちぬのま
おちぬのま

許とちりさうりおとまをさうりさうり又ね
 ゆり中はたさふちさうり小川よりまよとねの中
 ん百四十とやうさうり民長とひささ
 美向氏 これ又おひ氏のまねと似てはまよとゆきさうり藤とまね
さうりまよとゆきさうりおとまをさうりさうりさうりさうり
まよとゆきさうりおとまをさうりさうりさうりさうり
 高年とまよさうり年月のたよりは美の山のおねとま
 けさうりまよとゆきさうりさうりさうりさうりさうりさ
 らちれとまよとゆきさうりさうりさうりさうりさうりさ
 のおとまよとゆきさうりまよとゆきさうりさうりさ
 高年とまよとゆきさうりまよとゆきさうりさうりさ
 女月中のさうり藤のまよとゆきさうりさうりさうりさ

江の邊なる茅^{カヤ}の新瑞雪^{カヤ}を^{カヤ}とて人海^{カヤ}を^{カヤ}る^{カヤ}
カヤカヤカヤ
カヤカヤカヤ
 昔月^{カヤ}移る^{カヤ}は^{カヤ}巻^{カヤ}返^{カヤ}る^{カヤ}は^{カヤ}あ^{カヤ}ら^{カヤ}ぬ^{カヤ}ら^{カヤ}ぬ^{カヤ}
カヤカヤカヤ
カヤカヤカヤ

大徳四癸と秋九月朔日於八代郡高田庄上松本戸邑

山中写之

中村直道

